

# 日本における仏教絵本の成立

森 覚

## 1 仏教絵本とはなにか

明治末期から昭和初期にかけて、日本の仏教界では、児童布教活動の隆盛とともに、子ども向けの布教メディアが次々に現れた。その一つが、大正時代頃から登場した仏教絵本である。本発表では、現在も書店で販売されているキリスト教関連の絵本<sup>1)</sup>に比べて、知られていない仏教絵本に着目し、近代の日本でこのようなメディアが成立した要因について明らかにする。

仏教絵本は、子ども向けの仏教伝道教材として成立した近代絵本の一ジャンルである。広義的には、仏教に関する人物伝、寺院縁起、年中行事、仏教説話などの布教を目的としない作品を含める。また、近年では、大人の読者を意識した仏教絵本が刊行されている。

本論文では、近代以降に出版された仏教絵本について論じるが、もちろん、仏教を題材とする視覚的メディアは、絵本をはじめ、絵解きの掛図や絵巻物などのかたちで、近代以前から存在した。これらの前近代的メディアと、近代の仏教絵本とが異なるのは、前者が主に大人向けのメディアとして制作されたのに対し、後者が近代以降の学制施行により就学義務が課せられた子どもが読む児童書として制作されたことにある。

仏教絵本の場合は、出版されはじめた当初の中心的読者が、新中間層と呼ばれた都市生活者の子どもたちであった。しかしながら、実際は更に限定的であり、仏教教団に接点のある子どもたちが手にしていた。それでも仏教絵本の市場は、ビジネスとして成立するほどの規模があり、後には、仏教絵本を発行する商業出版社も現れている。

## 2 仏教絵本の成立要因

### 2-1 大正時代における出版界の状況と仏教児童文学

仏教絵本の成立については、おもに三つの要因があげられる。その第一は、大正時代における出版界の変革、第二がキリスト教からの影響、第三が国家の教育制度からの影響である。

このうち、第一の要因となるのが、大正時代における出版界の変革である。大正期の出版界では、印刷物の大量販売を可能にするため、「①流通網の全国的拡大・整備、②定価販売制の確立、③委託販売制の確立」<sup>2)</sup>という三つの流通改革が進んだ。それに伴い、出版の流通機構は、出版社・取次業者・小売店という形態になり、絵本というメディアは、新しく台頭した取次業者によって、都市部を中心に地方でも売られるようになる。

同時に、この時代の出版業者は、「絵本類、講談本などの演芸速記本類、「通俗」的な小説類、歌本類から、地図や暦、実用書類、ひいては双六・かるたなどの紙製印刷玩具類」<sup>3)</sup>といった江戸期から創業する草紙問屋の出版品目を受け継ぎながら、それらを新しい技術によって近代的な出版物に作りかえることも行っている。たとえば、この時代に実用化されたオフセット印刷や、プロセス平板と呼ばれる写真印刷技術は、高速印刷による大量部数化を実現し、より精密で鮮明なカラー印刷を可能にしている<sup>4)</sup>。

こうした出版業界の変化は、絵本制作と販売の環境を整備し、バリエーション豊かな絵本が発行される土台を形成した。現代使われる意味での「絵本」という呼称は、大正時代から昭和初期にかけて定着しているが<sup>5)</sup>、このことから、日本の絵本史にとって大正という時代が一つのターニングポイントであったことは間違いない。

また、大正時代といえば、倉田百三の『出家とその弟子』や菊池寛の『俊寛』などの、仏教をテーマとした文芸作品が多く発表されたことで知られている<sup>6)</sup>。仏教をテーマにした作品は、子どもの読物としても多く出版されており、明治末期から大正時代にかけての児童文学では、宗派および超宗派団体による仏教系児童雑誌が創刊されている。

明治末期から大正時代にかけては、仏典物語再話を主軸とする雑誌『日曜日』や『ルンビニ』、興教書院の仏教少年文庫シリーズや、『金の塔』、『仏教童話』、『金の鳥』などが発行される<sup>7)</sup>。

これらの雑誌には、相馬御風、白鳥省吾、室生犀星、

宇野浩二、塚原健二郎、宮原浩一郎、吉屋信子、小川未明、藤森秀夫、加藤武雄、中条百合子、南部修太郎、のちに早稲田大学教授となった吉田絃二郎などが作品を発表している<sup>9)</sup>。こうした大正文学界における仏教への関心は、宗派の布教活動と連動し、視覚的な教材開発の機運を高めることにつながったものと考えられる。

## 2-2 キリスト教からの影響

次に、第二の要因としてあげられるのが、キリスト教からの影響である。まず、最初に指摘しておきたいのは、仏教絵本の成立がキリスト教なくしてあり得なかったという事実である。

日本の仏教は、明治時代の廃仏毀釈以降、教勢を立て直しを図るため、新政府の欧化政策に従って教団活動の近代化を推進した。その際、手本としたのがキリスト教である。近代仏教がキリスト教から学んだことは多い。たとえば日本仏教の児童布教は、キリスト教に倣って始まったものであり、その活動を契機に生まれた仏教絵本などの視覚的メディアも、やはりキリスト教の伝道教材からヒントを得ている。

近代日本におけるキリスト教の活動は、保守性が強く国家神道体制に妥協的な立場をとり続けたカトリックよりも、数が少ないプロテスタント各派を中心に展開する<sup>9)</sup>。キリスト教の宣教師や教育家は、1872年の禁教令解禁直後から、子どもを布教対象としてとらえ、キリスト教信仰を基盤とする子女教育に力を入れていた。そのため、子どもが理解しやすい、視覚的な図像入りの伝道リーフレットや、掛図、カードを制作するなど、当時世界的に流行していた日曜学校運動の伝道ノウハウを日本に持ちこんでいる<sup>10)</sup>。

1901年以降になると、プロテスタントは、都市部で二十世紀大挙伝道と呼ばれる布教活動を展開し、教勢を拡大させる<sup>11)</sup>。児童布教の領域では、明治末期ごろからキリスト教の各団体が絵本を制作しはじめる。作品としては次のようなものがある。『ひかり』（青柳猛著 福音社 1882年）、『絵入小供の話第一編』（藤田求義著 日本基督教廣島教会安息日学校発行 1893年）、『クリスマス絵譚』（神原守文著 メソジスト出版（現・教文館） 1894年）、『絵入正教少年読本』（水島行揚他著 正教会編輯所、1902～1909年全9冊）<sup>12)</sup>。

この他に、明治末期から大正時代にかけて、新中間層と呼ばれる都市生活者の子どもに向けたキリスト教系児童雑誌が商業ベースで出版される。その代表的なものが、1914年に雑誌形式の絵本として創刊した婦

人之友社の『子供之友』である。

同誌の中心的な読者だった新中間層は、1900年代後半から大正期、戦間期にかけて、中等・高等教育機関の整備による学歴社会の成立と共に出現した、高学歴を有する社会階層である。この人々の特徴としては、頭脳労働という労働形態、俸給という所得形態、資本家と賃労働者の中間に存在するという社会階級構成上の位置、生活水準の中位性を有する点があげられる<sup>13)</sup>。また、新中間層の家庭には、①家内領域と公共領域の分離、②家族成員相互の強い情緒関係、③子ども中心主義、④夫は外で働き、妻の専業主婦になるという性別役割分担の進行、⑤家族の集団性の強化、⑥社交性の衰退、⑦非親族の排除、⑧核家族化という近代的な家族形態が備わっていたことも注目すべきところである<sup>14)</sup>。

新中間層の家庭は、親が高等・中等教育を終了した高学歴者ということもあり、子どもの教育に対して高い関心を持つ傾向にあった。とくにこの階層では、童心主義・厳格主義・学歴主義というそれぞれに矛盾・対立する三つの意識のなかで、我が子への教育が行われた。童心主義とは、教育を施す以前の純真無垢な子どもらしさを称賛し、「子ども自身の個性や自発性あるいは興味・関心」<sup>15)</sup>を尊重する教育意識のことである。厳格主義とは、童心主義と対立関係にあるもので、純真無垢な存在である子どもを幼いころから厳格にしつけるという教育意識である。さらに、無知な存在である「子どもに教育や学歴をつけさせて、将来の準備をさせることに主眼を置こうとする志向性」<sup>16)</sup>が学歴主義となる。

性別役割分担の進行により専業主婦化した妻たちは、家庭内の重要な仕事として、子どもの教育としつけに心血を注ぐことになる。妻は母親として、子どもを愛情深く育てる一方、子どもに高い学歴をつけさせるために、受験戦争へ駆り立てなければならなかった。なぜならば相続させるだけの莫大な家財を持たない新中間層にとって、子どもに高い学歴をつけさせることが、自らの社会的地位を相続させ、高い社会階級に出世させる唯一の手段となっていたからである<sup>17)</sup>。

ところが新中間層の家庭は、育児を教えてくれる親世代と同居しない都市部に住む核家族である。そのため、家庭における子どものしつけと教育は、主婦向けの実用的な婦人雑誌や育児書をマニュアルにして行われた<sup>18)</sup>。

『子供之友』には、創刊当初からこうした専業主婦の子どもたちを、新たな読者として取りこもうとする、ねらいがあった。その際、新中間層の主婦たちをひきつけるキーワードとなったのが、家庭内教育である<sup>19)</sup>。

婦人之友社の創業者である羽仁吉一・もと子夫妻は、1921年に自由学園を創立し、「キリスト教的自由主義にもとづく自由自治女子教育を」実践した教育家として知られる人物である。すでに婦人雑誌の出版をはじめていた羽仁夫妻には、日本における「絵本の不毛さを痛感し」<sup>21)</sup>、娘の説子と恵子に読ませる絵本を出版したいという構想が常々あった<sup>22)</sup>。そこで子どもに家庭内のしつけや社会生活の規範を身につけさせるという教育方針のもと、『子供之友』の創刊に乗り出す。

1914年、婦人之友社は、月刊子ども雑誌『子供之友』を創刊する。『子供之友』は、ポンチ画と呼ばれる風刺漫画の作家だった画家の北沢楽天や、同じく画家である竹久夢二が編集に参加した「母と子どもに向けた絵本雑誌」<sup>23)</sup>である。

この中では、毎年12月にクリスマス特集号を組むなど、時折、宗教色の強い記事を載せて、キリスト教をアピールすることも行われた<sup>24)</sup>。婦人之友社の出版物を読む新中間層の人々は、もともと農村から出てきた地方出身者の次男、三男たちである<sup>25)</sup>。彼らは、都市部に移り住むことで、故郷との地縁が断絶し、菩提寺である仏教寺院との結びつきが形骸化した状態にあった。仏教との関係が希薄になった新中間層の家庭において、キリスト教的自由主義にもとづく『子供之友』は、ほぼ抵抗なく受け入れられたと考えられる。

読者は、遊戯の一環として出版メディアを楽しみ、その一部は、キリスト教の信仰に慣れ親しんだ。その意味で『子供之友』は、子どもの一人ひとりを尊重し、遊戯を通じた教育を重視した大正自由主義教育のなかで<sup>26)</sup>、布教メディアとしての役割を果たしたといえる。

このように『子供之友』は、キリスト教布教の手段となり、新中間層の家庭を取りこんだキリスト教は、大正時代になると、都市生活の近代化とともに文化面、教育面で影響力を拡大する。

これに対して仏教側の布教活動は常に遅れをとってきた観がある。近世の徳川幕藩体制における仏教教団は、寺請制度を通じた権力者の統制機関としての役割を果たしており、宗旨人別帳や宗門檀那請合之掟によって「人々は菩提寺につよくしぼりつけられ」<sup>27)</sup>ていた。そのため、明治維新以降に制度が廃止されても、檀家制度は根強く残り、解禁後すぐに積極的な布教活動を行ったキリスト教に比べると、すでに膨大な信者数を抱える仏教教団が新しい信者の獲得に乗り出すことはほとんどなかった<sup>28)</sup>。

たとえば、明治時代に解禁されたキリスト教は、キリスト教系学校を設立し、布教の一環として積極的に

児童教育を行った。仏教界でも同様の試みとして宗立の学校運営が始められる。しかしその目的は、教団の後継者となる僧侶の養成教育であり、仏教系学校は、広く社会にむけて布教する教育機関とはならなかった<sup>29)</sup>。

ところが次第にキリスト教の拡大が顕著になると、事態を憂慮した日本の仏教界には、対抗措置として、都市部での組織的な布教を実施しようという機運が高まる。ただしそれは、日本仏教が伝統的に培ってきた布教手法によっておこなわれたわけではない。むしろ近代の布教では、児童布教で先行するキリスト教のノウハウを模倣した手法が採用されている<sup>30)</sup>。

例として児童布教のなかでは、大正時代から昭和20年代にかけて仏教日曜学校運動が隆盛する。仏教日曜学校とは、その名称の通り、キリスト教の日曜学校運動を手本としてはじめられた活動である。

近代キリスト教の児童教育には、ミッションスクールと幼稚園、日曜学校・教会学校が存在した。このうち、日曜学校・教会学校は、1780年にイギリス・グリースターのロバート・レイクス(Robert Raikes)がはじめた「サンデースクール」の宗教道徳教育を起源とし、世界的な運動に発展した児童布教運動である<sup>31)</sup>。

日曜学校運動が日本に伝来したのは幕末のことで、これと同時に伝道教材の制作もはじまる。その先駆けとして1875年末から1883年6月までには、神戸のキリスト教日曜学校を通じ、キリスト教系週刊誌『七一雑誌』という説話教材が発行される<sup>32)</sup>。この後も1883年に『萬國日曜学校學科』<sup>33)</sup>が翻訳され、1888年には『キリスト教新聞』<sup>34)</sup>を発行する。

一方、キリスト教の児童布教を目の当たりにした日本の仏教界でも、徐々にこれに対抗する動きが起こる。1890年には、東京・芝の増上寺と福岡・博多の萬行寺で、仏教日曜学校の先駆けとなる少年講・少年会・少女会を設立される<sup>35)</sup>。また、浄土真宗本願寺派では、1885年4月に宗主明如の発意により、島地黙雷ら本願寺築地別院の有志が築地少年教会を設立し、翌年に児童雑誌『少年』(後に『教草』と改題)を発刊する<sup>36)</sup>。

明治30年前後になると、少年講・少年会は全国に普及するが、その契機となったのも、やはり、明治16年頃に東京、広島、山口、長野などで盛んになったキリスト教の少年教会運動である。この活動は、明治40年前後に新しい展開を迎え、仏教日曜学校という名称が使われはじめる。仏教日曜学校運動は、1924年前後にピークを迎えるが、現在も同様の活動が続けられている<sup>37)</sup>。

運動では、高楠順次郎の『統一日曜学校教案』、神

根愷生の『日曜学校教案』、大関尚之の『仏教日曜学校教案』といった教案の確立とともに<sup>38)</sup>、児童教化の現場で用いる伝道教材の開発も行われる。

当初、伝道教材は、子どもの「宗教々育上役立つ」<sup>39)</sup>手段として制作された。「宗教々育」とは、「知識の教授ではない、論理や人名の暗記ではない、児童の心の琴線に觸れ、彼らの魂を動かす」<sup>40)</sup>児童教化のことである。伝道教材は「宗教々育」、言い換えれば「特定の宗教の教えを学ぶもの、その宗教の信仰に導き、あるいは信仰を深めることを目的とする」<sup>41)</sup>宗派教育のなかで用いられてきた。そのほとんどは、子どもの教化に用いることを前提にしていることから、「人智を超えたおおいなるもの」や「生命の根源」への「畏敬の念」<sup>42)</sup>を育む、宗教的情操教育<sup>43)</sup>の面での効果も考慮されている。

近代仏教における伝道教材の開発は、浄土宗の僧侶で幼児教育家の内山憲尚（1899年～1979年）<sup>44)</sup>という人物が中心となり進展する。内山は、伝道教材の普及を目的として、多くの著書を著しているが、その一部である『仏教童話とその活用』や『紙芝居の教育的研究』などには、仏教紙芝居、仏教讃仏歌、仏教戯曲、仏教人形劇などを制作した経緯が記されている<sup>45)</sup>。

内山自身が著書の中で指摘するように、多くの伝道教材は、キリスト教からヒントを得て作られている。そのため、内山の自著『紙芝居の教育的研究』でも、海外のキリスト教日曜学校で行われる黒板にチョークで絵を描きながら物語る絵噺や、仏教紙芝居の先駆者である賀川豊彦と今井よねのキリスト教紙芝居活動について紹介している<sup>46)</sup>。

仏教絵本は、こうした伝道教材の一つとして登場するが、いまのところ具体的な成立経緯について記す文献・資料は発見されておらず、最初の近代的仏教絵本作品についても明確に特定できていない。一つだけ言及できるのは、1894年に『クリスマス絵譚』というキリスト教絵本が出版されており<sup>47)</sup>、今のところ、それより先行する子ども向け仏教絵本は発見されていないことである。キリスト教の教育家たちが、いち早く視覚的なメディアに注目し、絵本の商業出版化に乗り出したことを考えると、やはり仏教絵本は、キリスト教に触発されて成立したメディアだといえる。

#### 2-3 国家の教育制度からの影響

最後に、第三の要因となるのが、国家の教育制度からの影響である。日本において絵本が子どもの媒体となるのは、近代以降のことである。明治末期になると、

絵本は子どもの発達に影響を与える教育的媒体として認識されるが、そうなった背景には、近代学校教育の影響がある。

1867（慶応3・明治元）年の王政復古の重大令により政権を樹立した明治新政府は、富国強兵と殖産興業の二大政策により、欧米列強諸国に倣った国家の近代化を推進する。その一環として1871年に設置された文部省は、フランスやアメリカといった「欧米諸国から学校教育制度や教育内容・方法」<sup>48)</sup>を移入し、公教育制度の整備をはじめた。

明治政府は、近代西洋の科学的知識を国民に広める「国民啓蒙」の役割を学校教育に期待していた。そのため、次世代の国家を担うすべての子どもたちが学校に就学することを奨励する「国民皆学」<sup>49)</sup>の理念が謳われる。

近代日本における学校教育は、1872年に布告した学制によってはじまる。学制の序文である「学事奨励に関する被仰出書」では、「教育や学問を、あらゆる個人的営為に関わって存在するもの、つまり個人の立身出世や治産・昌業の手段と捉え」<sup>50)</sup>、教育の基本理念として「立身出世を目指す個人主義的・能力主義的な人間形成を理想とした学問観」<sup>51)</sup>が示される。近代公教育制度の拡充と確立は、国家を挙げて推進され、「国家を指導する人材養成のためのエリート教育（高等教育＝大学教育）」<sup>52)</sup>と「国民一般の教育（初等教育＝小学校教育）」<sup>53)</sup>の更なる充実が行われる。

日本における近代学校教育制度の出現は、すべての子どもを国家規模で組織的に保護し、教育して社会の構成員として育てていくべき存在として位置づけた<sup>54)</sup>。こうして近代の子どもは、大人から分離して義務的に教育を課すべき対象<sup>55)</sup>となり、日本国民の諸家庭には、「子どもの周囲に家族が結晶」する「子ども中心主義」が形成させる<sup>56)</sup>。

近代的な子ども観は、学歴社会のなかで新中間層<sup>57)</sup>と呼ばれる社会階層の家庭を中心に拡大し、よりよい子どもを育てようとする意識を芽生えさせた。そのため、近代になると、大人と切り離された子どものための読物が出版されるようになり、子どもの教育によいと謳う児童向けメディアは売り上げを伸ばすようになる。

絵本が「子どもの教育によいメディア」といわれるようになった原因は、文部省が明治5年の学制施行と同時に導入した実物教授法にある。実物教授法は、図像を用いて児童の学習理解を促す教授法である<sup>58)</sup>。

アメリカのペスタロッチ主義や、ドイツ・ヘルバルト派の心理学などを取り入れたこの教授法は、図像を

多用する低学年用教科書や教育掛図という視覚教材として明治時代の初等教育に反映される<sup>59</sup>。これにより図版による教授法は、公教育を受ける子どもの家庭や、義務教育を受けた国民に周知されるところとなった。

また、1879年に明治天皇の意見として下賜された『教学聖旨』にある「小学條目二件」のなかでは、小学校の子どもに図像を用いて、仁義忠孝の道德観を教えるように指示する記述がある<sup>60</sup>。

#### 小学條目二件

一 仁義忠孝ノ心ハ人皆之有リ然トモ其幼少ノ始ニ其腦髓ニ感覺セシメテ培養スルニ非レハ他ノ物事已ニ耳ニ入り先入主トナル時ハ後奈何トモ爲ス可カラス故ニ當世小学校ニ給圖ノ設ケアルニ準シ古今ノ忠臣義士孝子節婦ノ畫像・寫眞ヲ掲ケ幼年生人校ノ始ニ先ツ此畫像ヲ示シ其行事ノ概略ヲ説諭シ忠孝ノ大義ヲ第一ニ腦髓ニ感覺セシメンコトヲ要ス然レ後ニ諸物ノ名狀ヲ知ラシムレハ後來思孝ノ性ニ養成シ博物ノ拳ニ於テ本末ヲ誤ルコト無カルヘシ<sup>61</sup>

「教学大旨」と「小学條目二件」の二部で構成される『教学聖旨』は、明治天皇の要望書という形式をとるが、実質的な考案は、明治天皇の侍講元田永孚によるものだとされる。その趣意は、洋学偏重主義で軽視された、日本の伝統的儒教教育や精神文化を、教育の根幹に据えるように要望する内容となる。そのため、「小学條目二件」では、小学校の幼少時に仁義忠孝の道德観を明確に教えこむことが大切であり、忠臣、義士、孝子、節婦の絵図を用いて、深く脳髓に忠孝の觀念を印象づけるべきだと説く<sup>62</sup>。

明治天皇からの要望が示されたことで、政府の教育政策は『教学聖旨』にもとづいて進展する<sup>63</sup>。元田永孚の儒教主義的復古思想教育は、古仁義忠孝を中心とする道德をまとめた『幼学綱領』の編纂を経て<sup>64</sup>、1890年に明治天皇から下賜された『教育ニ関スル勅語』、いわゆる「教育勅語」の布告へと結実する。

元田の思想が国民教育の基本方針となったことは、同時に「小学條目二件」で提唱された図像教材による教授法路線が、儒教主義的復古思想教育の確立とともに全国の受け入れられたことを意味した。明治20年代以降、多くの図版を載せた教科書は、継続的に制作され、図像と教科書は切り離せないものとなっていく<sup>65</sup>。

学校教育における図像の使用は、子どもの教育によいと謳う絵本が出版される根拠になった。1904年

に国定教科書が学校教育に導入される頃になると<sup>66</sup>、1908年に「教育絵本」という触れ込みで、教育的価値ある絵本というコンセプトを謳った金井信生堂の絵本が発刊しはじめる<sup>67</sup>。先ほどあげた『子供之友』をはじめとする大正時代の幼年絵雑誌では、そのほとんどが幼児教育の専門家を編集・顧問・主筆にむかえており、幼児教育や家庭教育論から絵本の教育的効用を宣伝することが行われた<sup>68</sup>。

幼年絵雑誌からうかがえる教育的絵本観は、絵本という媒体の教育的公益性を主張するものであった。しかし、ときにそれは、行政側に、教育上不適切という理由で、絵本を取り締まらせる大義名分ともなった。たとえば、昭和期になると、絵本は絵本浄化という名の国家的言論統制にさらされる<sup>69</sup>。満州事変および日中戦争が勃発し、国家総動員法が可決布告された1938年には、内務省警保局図書課から不良絵本排除の通達があった<sup>70</sup>。これにより、文部省及び日本出版文化協会の推薦絵本を読むことが「最も賢明な繪本の選び方」<sup>71</sup>とされたのである。

近代の絵本が教育的価値を帯びるようになった一因は、国家が国民を再生産する媒体手段として視覚表現を利用したことにある<sup>72</sup>。日本における近代以前の絵本は、とくに児童教育のメディアとして扱われたことはない。しかしすべての子どもに就学の義務が課せられた近代になると、絵本は児童の読解を円滑にするメディアとして注目されるようになる。

日本の仏教界が、児童向けの布教メディアとして絵本を用いたのは、キリスト教の児童布教活動に触発されたことだけが動機ではない。仏教界が絵本を用いたには、いま述べたような絵本というメディアに与えられた教育的役割というものがある。すなわち仏教絵本は、教育的効果が見出された絵本というメディアを宗教教育に用いるという発想から生まれたものと考えられる。

### 3 むすび

ここまで仏教絵本の成立に関連する三つの要因をみてきた。近代日本の仏教史と児童伝道教材の展開をふまえ、仏教絵本の成立要因について以下の5項目でまとめる。

- (1) 仏教絵本の制作は、大正時代における出版界の流通構造と印刷技術の革新によって可能になったこと。
- (2) 仏教絵本の対象読者は、キリスト教への改宗者が増加した都市部の新中間層である。つまり仏教絵

本は、都市部に勢力を伸ばすキリスト教に対抗する措置の一環として作られたものと考えられる。

- (3) 仏教絵本は、対立関係にあったキリスト教の布教活動を模倣するなかで登場した仏教伝道教化材の一種である。
- (4) 仏教絵本は、近代教育制度が形成した教育を受ける子ども観にもとづき、キリスト教の日曜学校と同様、児童に向けた宗教道徳教育の教材として制作される。
- (5) 子どもの教育によいとされる近代の絵本は、明治時代の文部省が学制施行と同時に導入した実物教授法の影響から登場した。仏教絵本は、その教育的な絵本を宗教教育に導入したものである。

以上の項目は、大正時代あたりからはじまる仏教絵本とそれ以前の仏教絵本を区分する基準になると同時に、仏教絵本の諸表現がいかなる歴史的背景のもとで形成・成立したかを示すものとなる。

最後に、現在確認している仏教絵本で、最古の作品となる『親鸞聖人エバナシ』について多少ではあるが触れておく。『親鸞聖人エバナシ』が刊行したのは、1923年のことであるが、この年には、浄土真宗をあげて立教開宗700年と親鸞650回忌が営まれている。奥付には、出版元として真宗各派協和会の名称がある。この団体は、現在の真宗教団連合の前身で、絵本の刊行と同じ、大正12年に、真宗十派によって結成されている<sup>73)</sup>。

『親鸞聖人エバナシ』は、宗派が記念品的なものとして制作した宗祖の伝記絵本である。しかし、明治時代以前には、教団が組織的に刊行した絵本は存在しなかった。それが大正時代になり、仏教教団や団体が子ども向けの仏教絵本を出版したことは、きわめて近代的な現象だといえる。そこには、国家とキリスト教の狭間で布教活動をおこなった近代日本仏教の模索がうかがえる。

## 註

- 1) 鳥越信『シリーズ・日本の文学史③はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅱ——15年戦争下の絵本——』ミネルヴァ書房 2002年2月25日 pp.257-270.
- 2) 鳥越信編著『シリーズ日本の文学史②はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅰ——絵入本から画帖・絵ばなしまで——』ミネルヴァ書房 2001年12月15日 p.80.
- 3) 鳥越信編著『シリーズ日本の文学史②はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅰ——絵入本から画帖・絵ばなしまで——』ミネルヴァ書房 2001年12月15日 p.78.
- 4) 鳥越信編著『シリーズ日本の文学史②はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅰ——絵入本から画帖・絵ばなしまで——』ミネルヴァ書房 2001年12月15日 pp.102-103.
- 5) 鳥越信編著『シリーズ日本の文学史②はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅰ——絵入本から画帖・絵ばなしまで——』ミネルヴァ書房 2001年12月15日 p.4.
- 6) 柏原祐泉『日本仏教史 近代』吉川弘文館 平成2年6月1日 pp.172-173. 吉田久一『近現代仏教の歴史』筑摩書房 1998年2月20日 pp.170-174.
- 7) 上笙一朗「〈宗教児童文学〉の構図——神道・仏教・キリスト教系の児童文学——」(日本児童文学学会編『研究=日本の児童文学2 児童文学の思想史・社会史』東京書籍 1997年4月21日) pp.150-152.
- 8) 上笙一朗「〈宗教児童文学〉の構図—神道・仏教・キリスト教系の児童文学—」(日本児童文学学会編『研究=日本の児童文学2 児童文学の思想史・社会史』東京書籍 1997年4月21日) pp.151.
- 9) 村上重良『日本宗教事典』講談社 1988年7月10日 p.346.
- 10) 鳥越信『シリーズ・日本の文学史③はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅱ——15年戦争下の絵本——』ミネルヴァ書房 2002年2月25日 pp.257-258.
- 11) 村上重良『日本宗教事典』講談社 1988年7月10日 p.354.
- 12) 鳥越信『シリーズ・日本の文学史③はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅱ——15年戦争下の絵本——』ミネルヴァ書房 2002年2月25日 pp.257-258.
- 13) 寺出浩司『生活文化論への招待』弘文堂 1994年12月30日 pp.185-186.
- 14) 落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房 1989年12月1日 p.18.
- 15) 小針誠『教育と子どもの社会史』粹出版社 2007年5月20日 p.72.
- 16) 小針誠『教育と子どもの社会史』粹出版社 2007年5月20日 p.77.
- 17) 小針誠『教育と子どもの社会史』粹出版社 2007年5月20日 p.77.

- 18) 小針誠『教育と子どもの社会史』梓出版社  
2007年5月20日 p.77.
- 19) 田中穰『田中穰が見た羽仁吉一・もと子と婦人之友社 100年』婦人之友社 2003年4月3日 p.76.  
鳥越信編著『シリーズ日本の文学史②はじめて学ぶ日本の絵本史——絵入本から画帖・絵ばなしまで——』ミネルヴァ書房 2001年12月15日 pp.324-328.
- 20) 田中穰『田中穰が見た羽仁吉一・もと子と婦人之友社 100年』婦人之友社 2003年4月3日 p.13.
- 21) 田中穰『田中穰が見た羽仁吉一・もと子と婦人之友社 100年』婦人之友社 2003年4月3日 p.70.
- 22) 田中穰『田中穰が見た羽仁吉一・もと子と婦人之友社 100年』婦人之友社 2003年4月3日 p.73.
- 23) 田中穰『田中穰が見た羽仁吉一・もと子と婦人之友社 100年』婦人之友社 2003年4月3日 p.76.
- 24) 田中穰『田中穰が見た羽仁吉一・もと子と婦人之友社 100年』婦人之友社 2003年4月3日 p.79.
- 25) 小山静子『家族の生成と女性の国民化』勁草書房  
1999年10月15日 p.40.
- 26) 梅根悟監修 世界教育史研究会編『世界教育史大系 22 幼児教育史Ⅱ』講談社 昭和50年10月20日 pp.104-115.
- 27) 大角修『すぐわかる日本の仏教』東京美術 平成17年10月25日 p.66.
- 28) 大角修『すぐわかる日本の仏教』東京美術 平成17年10月25日 pp.74-75.
- 29) 井上順孝「近代日本の宗教と教育」(國學院大學日本文化研究所『宗教と教育—日本の宗教教育の歴史と現状』弘文堂 平成9年3月15日) p.19.  
斎藤昭俊『仏教教育の世界』北辰堂 1993年2月15日 pp.290-307.
- 30) 日曜学校沿革史編纂委員会編『日曜学校沿革史—本願寺派少年教化のあゆみ』浄土真宗本願寺派少年連盟 2007年1月24日 p.21. p.45. 斎藤昭俊『近代仏教教育史』国書刊行会 昭和59年2月25日 p.78.
- 31) 学校法人上智学院 新カトリック大事典編纂委員会『新カトリック大事典 第3巻』研究社 2002年8月 p.1457. 高木壬太郎著 阿部義宗監修『基督教大辞典 全増補版』警醒社 明治44年11月13日 pp.967-972. 日曜学校沿革史編纂委員会編『日曜学校沿革史—本願寺派少年教化のあゆみ』浄土真宗本願寺派少年連盟 2007年1月24日 p.1. 斎藤昭俊『近代仏教教育史』国書刊行会 昭和59年2月25日 p.76.
- 32) 日本児童文学学会編『日本のキリスト教児童文学』国土社 1995年1月25日 p.34.
- 33) 内山憲尚『佛教童話とその活用』興教書院 昭和16年1月1日 p.21.
- 34) 内山憲尚『佛教童話とその活用』興教書院 昭和16年1月1日 p.21.
- 35) 内山憲尚『佛教童話とその活用』興教書院 昭和16年1月1日 pp.21-23.
- 36) 日曜学校沿革史編纂委員会編『日曜学校沿革史—本願寺派少年教化のあゆみ』浄土真宗本願寺派少年連盟 2007年1月24日 pp.3-8.
- 37) 内山憲尚『佛教童話とその活用』興教書院 昭和16年1月1日 pp.21-23.
- 38) 内山憲尚『佛教童話とその活用』興教書院 昭和16年1月1日 p.23.
- 39) 内山憲尚『佛教童話とその活用』興教書院 昭和16年1月1日 p.20.
- 40) 内山憲尚『佛教童話とその活用』興教書院 昭和16年1月1日 p.19.
- 41) 藤原聖子「何が問題か? 宗教教育の種類と歴史的背景」(渡邊直樹編『宗教と現代がわかる本』平凡社 2007年3月18日) p.106.
- 42) 藤原聖子「何が問題か? 宗教教育の種類と歴史的背景」(渡邊直樹編『宗教と現代がわかる本』平凡社 2007年3月18日) p.106.
- 43) 小口偉一 堀一郎『宗教学辞典』東京大学出版 1973年12月20日 pp.310-311.
- 44) 内山憲尚(1899(明治32)年~1979(昭和54)年)は、日本の口演童話家・幼児教育家である。1921年大阪今宮釜ヶ崎四恩学園の子ども会に手を染めたことにより、口演童話、児童文化など、生涯児童教化の理論と実践に携わるようになる。1922(大正12)年、芦谷重常が中心となって設立した日本童話協会活動に協力し、「童話学」を学ぶ。1924(大正14)年に芝増上寺明德学園主事となり、仏教日曜学校運動を推進。1931年に「子どもの人形座」を主宰し、人形劇普及運動に尽力。1944(昭和19)年、聖美幼稚園長に就任、東京高等保母学校を設立。1946(昭和21)年、芦谷重常の他界後、日本童話協会を再建する。1947(昭和22)年以後、日本私立幼稚園連合会初代理事長や全国保育連合会事務局長、駒沢大学、鶴見女子大学教授を歴任し、児童文化の発展、保育者の養成に貢献。1929(昭和4)年に

- 設立し、戦後に再建された日本仏教保育協会では、児童教化事業の指導者として保育カリキュラムや教案の作成、紙芝居や絵本、讃歌集などの教化材開発に携わる。青少年生活のなかに仏教を反映させ、宗教的情操教育を通して、教育を推進させようとした。大阪国際児童文学館『日本児童文学大事典 第一巻』大日本図書 1993年10月31日 pp.109-110.
- 45) 内山憲尚『佛教童話とその活用』興教書院 昭和16年1月1日。内山憲堂 野村正二『紙芝居の教育的研究』玄林社 昭和12年5月31日。
- 46) 内山憲堂 野村正二『紙芝居の教育的研究』玄林社 昭和12年5月31日 pp.80-83. 山本武利『紙芝居 街角のメディア』吉川弘文館 2000年10月1日 pp.12-13. pp.42-44. 今井よね『紙芝居の実際』基督教出版社 昭和9年4月21日(編上笙一郎 富田博之『児童文化叢書 34 第三期』大空社 1988年4月24日) pp.107-129.
- 47) 鳥越信『シリーズ・日本の文学史③はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅱ ——15年戦争下の絵本——』ミネルヴァ書房 2002年2月25日 p.258.
- 48) 小針誠『教育と子どもの社会史』梓出版社 2007年5月20日 p.24.
- 49) 小針誠『教育と子どもの社会史』梓出版社 2007年5月20日 p.25.
- 50) 小針誠『教育と子どもの社会史』梓出版社 2007年5月20日 p.25.
- 51) 小針誠『教育と子どもの社会史』梓出版社 2007年5月20日 p.25.
- 52) 小針誠『教育と子どもの社会史』梓出版社 2007年5月20日 p.24.
- 53) 小針誠『教育と子どもの社会史』梓出版社 2007年5月20日 p.24.
- 54) 山梨俊夫『描かれた歴史——日本近代と「歴史画」の磁場——』ブリュッケ 2005年7月31日 p.48. 仲新監修・編 持田栄一編『学校の歴史 第一巻学校史の概説』第一法規出版 昭和54年5月25日 pp.3-24.
- 55) 上笙一郎『近代以前の児童出版美術』久山社 1995年10月5日 pp.34-35. 海後宗臣・新仲・寺崎昌男『教科書でみる近現代日本の教育』東京書籍 1999年5月12日 pp.25-30.
- 56) 落合恵美子『近代家族とフェミニズム』勁草書房 1989年12月1日 p.81.
- 57) 加藤秀俊 前田愛『明治メディア考』河出書房新社 2008年12月30日 pp.148-154.
- 58) 海後宗臣・新仲・寺崎昌男『教科書でみる近現代日本の教育』東京書籍 1999年5月12日 pp.46-47.
- 59) 海後宗臣・新仲・寺崎昌男『教科書でみる近現代日本の教育』東京書籍 1999年5月12日 pp.33-37. p.41. pp.46-47. p.51. pp.65-67. pp.79-80. p.80. pp.82-83. pp.85-88. pp.100-104.
- 60) 『元田永孚と明治国家 明治保守主義と儒教的理想主義』吉川弘文館 2005年6月1日 pp.267-269. 森川輝紀『教育勅語への道』三元社 1990年5月10日 pp.97-103
- 61) 『国民精神文化文献 22 教育勅語渙発関係資料集第一巻』国民精神文化研究所 昭和13年3月25日 pp.3-4.
- 62) 海後宗臣・新仲・寺崎昌男『教科書でみる近現代日本の教育』東京書籍 1999年5月12日 pp.55-57.
- 63) 海後宗臣・新仲・寺崎昌男『教科書でみる近現代日本の教育』東京書籍 1999年5月12日 p.57.
- 64) 海後宗臣・新仲・寺崎昌男『教科書でみる近現代日本の教育』東京書籍 1999年5月12日 p.59.
- 65) 海後宗臣・新仲・寺崎昌男『教科書でみる近現代日本の教育』東京書籍 1999年5月12日 pp.81-85.
- 66) 海後宗臣・新仲・寺崎昌男『教科書でみる近現代日本の教育』東京書籍 1999年5月12日 pp.94-95.
- 67) 鳥越信編著『シリーズ日本の文学史②はじめて学ぶ日本の絵本史——絵入本から画帖・絵ばなしまで——』ミネルヴァ書房 2001年12月15日 pp.175-178. pp.191-194. 鳥越信『シリーズ・日本の文学史③はじめて学ぶ 日本の絵本史Ⅱ ——15年戦争下の絵本——』ミネルヴァ書房 2002年2月25日 p.4. 監修中村修也『よくわかる伝統文化の歴史⑤文明開化の日本改造 明治・大正時代』淡交社 平成19年6月5日 p.37.
- 68) 鳥越信編著『シリーズ日本の文学史②はじめて学ぶ日本の絵本史——絵入本から画帖・絵ばなしまで——』ミネルヴァ書房 2001年12月15日 p.324.
- 69) 教育的観点からの子どもにより絵本をめぐる論議は戦後も度々行われる。早川元二「絵本——幼児絵本を中心に——」(菅忠道編『現代児童文化講座 上』双龍社 昭和26年4月15日) pp.198-219.



- 70) 牛島義友 矢部信一『繪本の研究』協同公社出版部 昭和18年4月30日 pp.8-10. 鳥越信『シリーズ・日本の文学史③はじめて学ぶ 日本の絵本史Ⅱ ——15年戦争下の絵本——』ミネルヴァ書房 2002年2月25日 pp.16-20.
- 71) 牛島義友 矢部信一『繪本の研究』協同公社出版部 昭和18年4月30日 p.17.
- 72) ルイ・アルチュセール『再生産について——イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置——』平凡社 2005年5月20日 pp.201-213.
- 73) 真宗教学研究編『近代大谷派年表』東本願寺出版部 昭和52年8月30日 pp.138-139.『週刊仏教新発見』朝日新聞社 2007年11月11日 pp.5-6.